平城宮才12·13次発掘調査概報.

奈良国立文化財研究所

平城宮第12・13次発掘調査概報

特別史跡「平城宮跡」の第12次調査は、今年度当初から、現国有地の北端にある発掘調査事務所の西南方、約20アール（6AAQ-B・D・F地区）で行い、ひきつづき第13次調査を、通称一条通りの北方約60アール（6AAB-u，6AAO-c・D・F・H・I・K・v地区）で行なった。以下その結果を略述する。

(1) 第12次調査

この地域は、第2次内裏南東部にあたり、検出した主な遺構は、建物2棟、回廊2面、柵2列であって、これらが少なくとも3回にわたって造営されている。

第2次内裏以前の遺構としては、調査地域南部に東西方向の掘立柱柵（柱間各3m）がある。この柵は掘立柱回廊（SC247）と重複しており、回廊よりも古い時期のものである。この柵の東・西限は未確認であるが、今回の調査では、14間分を検出した。第2次内裏の遺構としては、築地回廊1、掘立柱回廊1、建物1がある。調査地南端で検出した東西方向の凝灰岩雨落溝は、内裏内郭を画する南面築地回廊の北辺雨落溝である。前回検出した内裏正殿の東南建物（SB440）の南3mをへだて、南北にならぶ9間×2間の南北棟（柱間各3m）は、正殿の東南建物や、掘立柱回廊と、それぞれ柱通りがそろう。この東にある南北方向の掘立柱回廊（SC247）（柱間各3m）は、南面築地回廊に接続し、内裏内郭前面中央部を閉鎖している。今回13間分を検出し、これで掘立柱回廊は南北22間の全規模を知ることができた。この回廊の東西の雨落溝は素掘りのものであるが、築地回廊北雨落溝との接合部分にのみ凝灰岩切石が用いられている。

第2次内裏以後に造営された遺構としては、掘立柱回廊の東柱列に重複する南北方向の掘立柱柵列（SA248）と、内裏正殿の南に並んで検出した建物（SB447）がある。柵列（柱間各3m）は今回12間分、前回までの調査と合せて17間を確認したが、南限は未確認で

ある。正殿の南の建物は9間×4間東西棟（柱間各3m）掘立柱建物で、その規模は前回の調査で判明していたが、今回南側柱の南2.8mに柱通りのそろう小柱穴列を検出した。この建物と柵列は柱通りがそろい、同一時期の造営によるものと思われる。

このほかに平城宮以前の遺構として、神明野古墳（SX219）の後円部西側周濠を検出した。

遺構は以上のようであるが、遺物は小量で、これまでの調査と同種の瓦が少量出た。

平城宮の第2次内裏地に掘立柱回廊にかこまれた内裏中心部が、平安宮内裏とよく似ていることは、これまでの調査であきらかである。正殿（SB450）は平安宮の紫宸殿・正殿東南の建物（SB440）は、その宜陽殿の前身にあたるものと考えられるが、今回新たに発見した9間×2間も、また平安宮の春興殿にあたるものとみることができる。

（2）第13次調査

この地域は第2次内裏の東北部で、第11次調査地域の東方にあたる。遺構については、記述の都合上、東半部（6AAB-u、6AAO-c.の地区）と西半部（6AAO-B,H,I,K,V地区）に分けて報告する。

（1）東半部

東半部で検出した主な遺構は、建物11棟、築地一面、井戸1基、溝2条、土坑2、炉跡2基などである。これらの遺構には、少なくとも4回にわたる造営が認められる。建物は6AAO-D地区北部の小礫石を用いた1棟を除くほかは、すべて掘立柱のものであった。なお6AAB-u地区では、地山が低いため、全域に盛土を行い、その上にすべての遺構を造営している。

〔A期〕

6AAB-u地区中央北部で、東妻柱と南側柱列を検出した東西方向7間建物（柱間各3m）がある。u地区西北隅にある約3mの土坑もこの期に属し、これから多数出土した木簡の中に天平19年銘を有するものがあって、この土坑の埋没期を天平末年に求めることが

できる。

〔B期〕

この時期に最大規模の造営が行なわれ、建物3棟と築地一面が造営される。U地区東方で検出した南北方向の建物は、梁間2間、桁行6間以上の身舎の東西両面に庇がつき（柱間各3m）この地区で最も大きな規模のものである。この建物の南約 11mに、この建物の東側柱列と東妻をそろえて建てられる東西方向7間の建物（柱間各2.6m）、南半部が未確認である。U地区西南部には、東西方向3間、南北方向2間（柱間各2.4m）の東西棟建物があり、この南側柱列と、前記の7間東西棟建物の北側柱列がそろう。U地区東端を南北に走る築地は、基礎地形として整地層を約50cm掘りさげて、この上に黄褐色粘土質土を積みあげたもので、東端は後世破壊されているが、基礎地形等の現在幅は北端で約6m残っている。この上には東西約2mの間隔に、南北方向2列の掘立柱小穴があり、これは築地構築の際に造営に要した柱穴であろう。

〔C期〕

U地区西北部で南北6間以上、東西2間（柱間各3m）の南北棟建物を検出した。この建物はA期の土坑埋土の上に建てられている。

〔D期〕

U地区中央北寄りに、東西方向6間、南北方向4間の東面棟建物がある。この建物は4間×2間（柱間各2.4m）の身舎の四面に庇がつく。

このほかにU地区東南部の5間×1間以上東西棟（柱間各2.4m）、中央部の北庇のつく5間×3間東西棟（柱間各2.4m）、西南部の2間以上×2間の南北棟（柱間各3m）、6AAO-C地区の5間×2間南北棟（柱間各2.4m）、6AAO-D地区3間×2間南北棟（柱間各2.2m）などの建物があるが造営期が明らかでない。また6AAO-C地区の東西方向の溝、6AAO-D地区北方の溝、6AAO-D地区中央部にある土坑についても造営期は不明である。この土坑から木簡が39点出土した。

6AAB-H地区東部にある井戸は出土遺物からみて廃絶期を平城上皇の時期に推定される。なおH地区中央部北端で、平面が長方形の炉址2基を検出した。この炉はA期以前に作られている。また平城宮造営以前の遺構として、6AAO-D地区南部で、市庭古墳東周濠東岸の一部を検出した。

以上の4面にわたる造営期のうち、B期はそれに用いられたと思われる瓦から、才2次内裏造営期と期を同じくするものと考えられる。南北方向の築地は、現地形から判断して、才2次内裏外郭を画する東面築地になるものとみられ、その内に造営された殿舎は、内裏内郭との位置関係からみて、平安宮の「華芳坊」にあたる一郭に属するものと考えられる。従ってA期は才2次内裏造営以前、CD期はそれ以後の造営ということになる。

(ロ) 西半部

今回新たに検出された主な遺構は、建物11棟、掘立柱列1、井戸1などである。

調査地域の南端には、才2次内裏内郭北側を限る回廊の北側柱列と、それに伴なう雨落溝とが東西に走っている。これらは前年度までに調査されたものゝ東の延長部である。桁行柱間は約4m、凝灰岩の礎石を持つものである。これに伴なう雨落溝は凝灰岩切石作りである。これも前年度発掘したものゝ延長である。その35m北に一条の溝が調査地域の中央以西にある。幅約1m、ながさ70mほどあり中央部で北方に屈曲し、約20mほど北で、さらに北東に曲り、6AAO地区東半部に達している。この溝は延長部で浅くなる。これらの溝の北側は幅3mの築地痕跡が東西にあり、これも昨年度調査した築地の東延長部である。この築地の北側には、東半部に中3mほどの石敷きがある。

掘立柱11棟のうち東西棟6棟、南北棟5棟である。これらの建物は少なくとも6期に分けられる。

[I期]

I期に属するものは、調査地域の中央部にある7間以上×5間・

4面庇付の東西棟(6)である。柱間は桁行・梁行ともに3mの等間で、この地区で最大の規模のものである。この北側にある5間×3間の東西棟(8)は、次の2期に属するものより柱関係において古いから、あるいはこの期に属するかも知れない。これは身舎2間で、南北廂を持ち、柱間寸法は桁行2.1m、梁行1.5mである。

〔2期〕

1期の建物の東よりに重なる5間×2間の南北棟(7)がこの期に属する。柱間は桁行・梁行とも2.4m

〔3期〕

この期に属するものは11間×2間の南北棟(4)で柱間は桁行2.85m、梁行3mである。

〔4期〕

もつとも母屋に近い5間×2間の東西棟(2)で、柱間は桁行2.4m、梁行2.7mである。　※5期は7頁

〔6期〕

この期に属するものは調査地域の東よりに位置する2棟である。その一は7間×2間の南北棟(9)で柱間は桁行・梁行とも2.4mである。北から5間目に間仕切りがあるが、この間仕切りまでは西側に3m離れて柱穴が並ぶ。柱穴の大きさからみて、西廂とするには疑問もある。他の一は4間以×3間の東西棟(10)、南廂付で柱間は梁間、桁行とも2.85mである。この両者に共通することは建物の計画方向がやゝ西にふれていることである。南北にはしる柵列も或いはこの期に属するものかもしれない。この期の建物の柱間は2.4mであることから考えて、時期のさがるものであり最も新しいものであろう。

時期の不明のものは3棟ある。一は3間×2間の東西棟(3)で、柱間は梁行、桁行ともに2.5mである。他は3間×2間(?)の南北棟(1)で柱間はこれも桁行、梁間とも2.4mである。他の一は3間(n)×2間の南北棟(11)である。柱間は桁行が南の方で3m北の方で4.5mと等間でなく梁間は2.4mである。現在2間までしか分らないが、北側はさらに1間のびるものと思われる。

この地域の南半分は市庭古墳の前方部をとりまく中約40mの周濠の地域であり、埋めたて、整地されたものである。

（3）遺　物

遺物は柱穴・土坑・溝・井戸・盛土などから発見され、木簡を始めとし、多量の瓦、土器・陶類・漆・繊維・木の各製品・若干の自然遺物がある。

木　簡

木簡は6AAO区の土坑と6AABEの土坑の二ヶ所で発見された。まだ調査続行中であるが、すでに細片を合せて150点以上が発見された。その若干を例示する。

6AAO・土坑

「左衛士府」

「□□□□
建部益人」

「□多紀国□」

「他田(オサダ)床足」

「刑部石次冊□」

6AAB区土坑

表「□□検校稟試佰陸拾伍箇　六乙六束

裏　□中務少丞池田足継　」

「若狭国遠敷郡[illegible]調三斗」

「□□国播豆郡藤島海部□」

「□□国賀茂郡□□郷戸主□□□」

「□志郡和昊郷伊祐須」

表「阿波国板野郡井隈郷□

裏　戸主海部馬長戸同部□　」

「常陸国鹿島郡播麻郷大贄」

「四(天平十八年)年閏九月料御贄宇波加麻剪六口」

「天平十九年七月廿三日」

木簡は6AAB土坑出土のものでは特に天皇の御膳の海産物関係の

もの、また6AAO土坑出土のものは左衛士府や人名記載のものが著しい。

瓦

全域から多量の瓦類、塼が採集されている。丸・平瓦、軒丸・軒平瓦のほか鬼瓦も発見した。軒丸・軒平瓦では、才二次内裏造営の時用いた一組（6311－6664）が最も多く、また小型の軒丸・軒平瓦（6313－6685）が、6AAB区東端の築地の雨落溝から多く出土し築地にこれが用いられたことを示している。

なお6AAO区の木簡出土土坑の上層から縦紐を施した平瓦を1点発見した。

土　器

土師器、須恵器が主で、墨書銘を有する土器もある。種類も平城宮出土土器としては一般的な、坏、皿、碗、壺、甕などが大部分である。6AAQ区は遺構の性格上、土器は少いが、北側の6AAO区の土坑、6AAB区、築地西側の地山上面炭層では多量に検出された。6AAB区木簡出土の土坑から検出された土器は、伴出の木簡より天平末年頃のものとして土器の編年的研究の上で、その意義は大きいものがあろう。6AAB区の東の井戸からは墨書銘のあるものが発見された。

「醴大郎　炊せ取不得　若取者答五十」

この墨書は土師器杯の外面と底にあり土器様式上平安初期のものである。また数点の陶製円硯が検出されているが、うちに鳥形の硯と八花硯があった。

その他に漆の冠の断片、むしろ断片などが発見され、木製品ではヘラ・箸・曲物底部、木炭、タキ木などが検出されている。

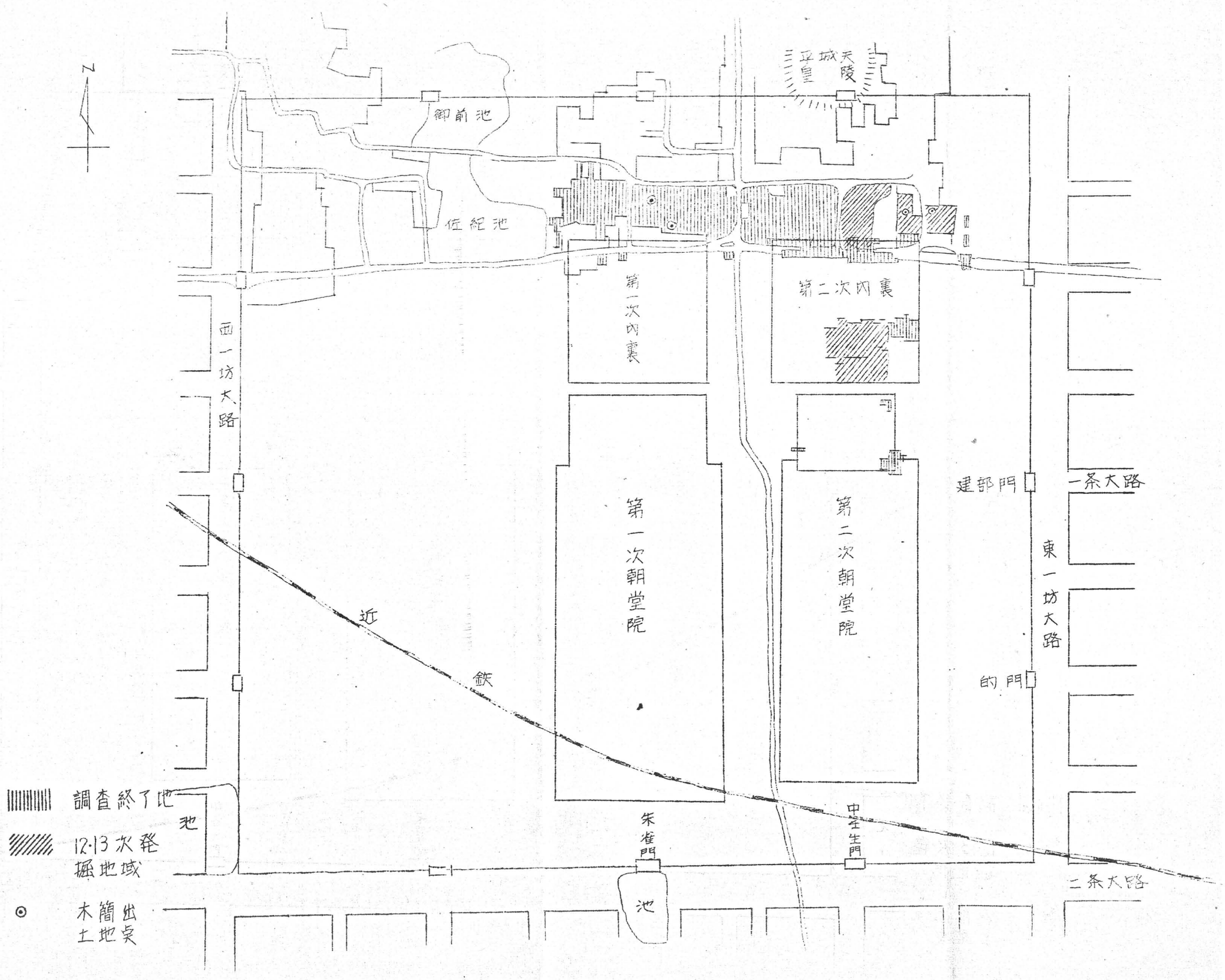
他自然遺物ではクルミ、桃、栗、瓜等の種子がある。

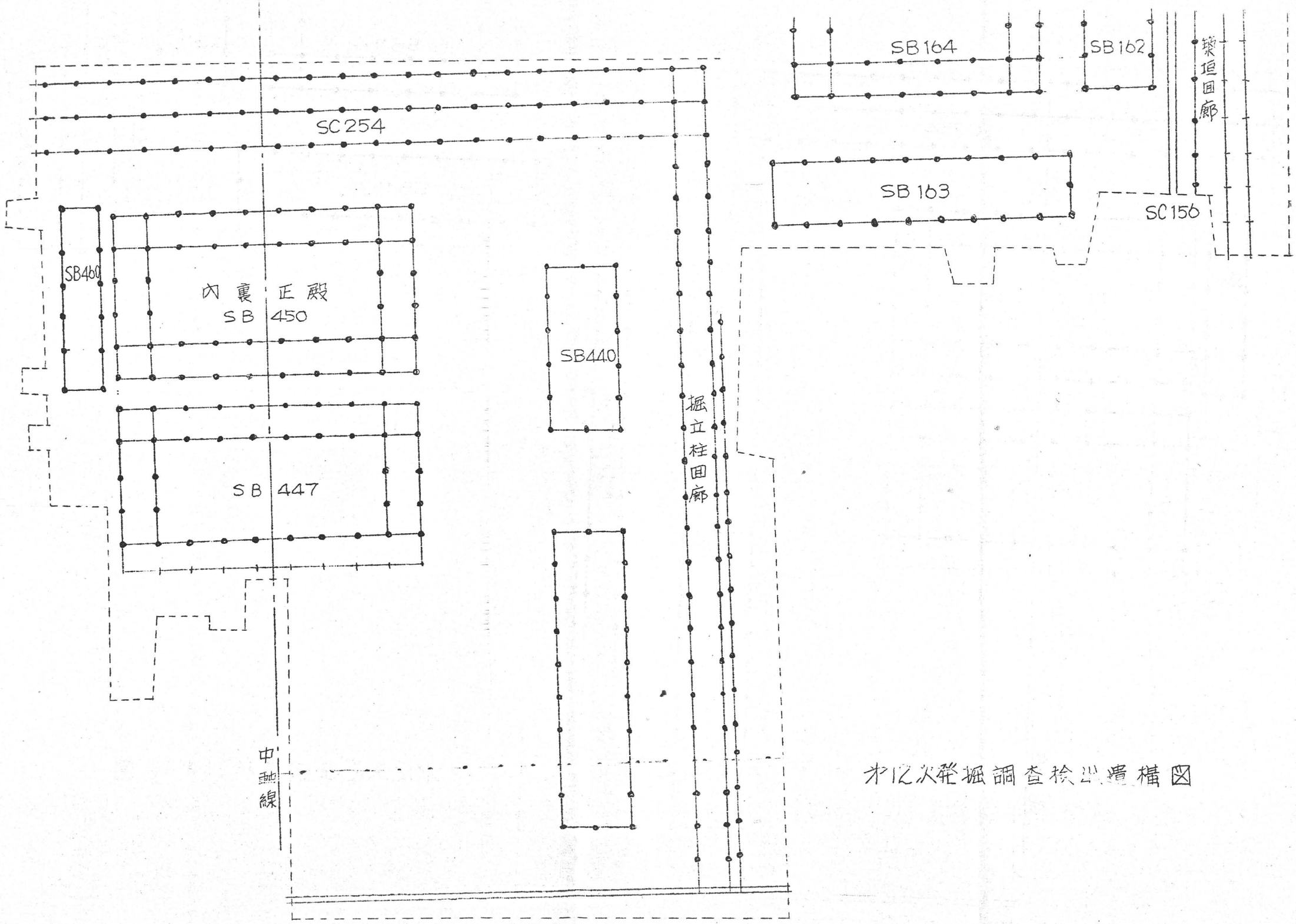
（ア）

※　［5期］

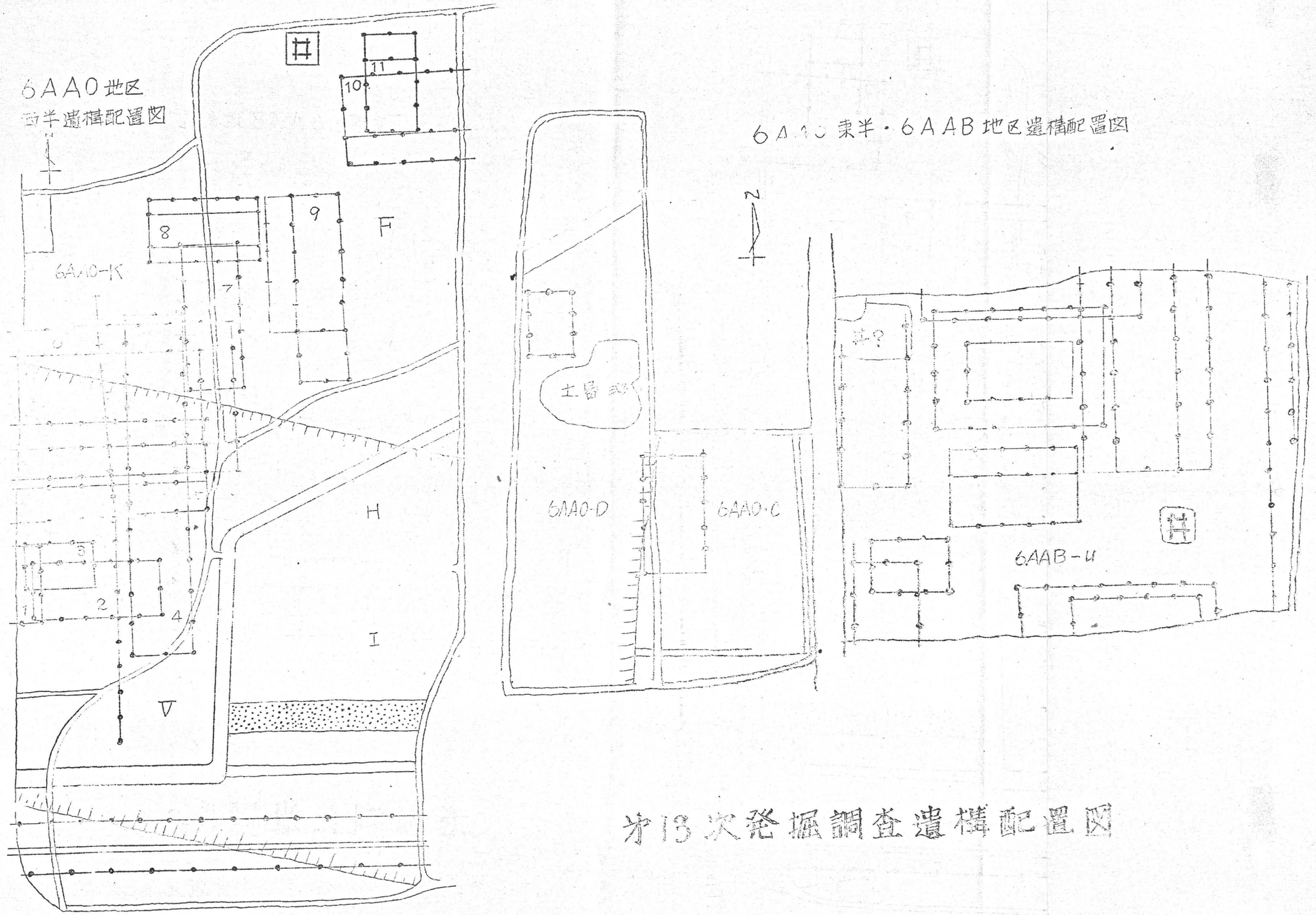
1期の建物の南よりに重なる6間以上×3間の東西棟(5)がこれに属す。南廂付の建物で、柱間は桁行3m梁行2.85mである。建物の南

1mほどの所に雨落溝がある。これは1～4期のどれとも切り合わないので前後関係は明らかでない。しかし雨落溝と3期建物の関係から、3期以降のものと考えられる。


N
御前池
佐紀池
天皇陵
城
第一次内裏
第二次内裏
西一坊大路
第一次朝堂院
第二次朝堂院
建部門
一条大路
東一坊大路
的門
近鉄
朱雀門
中生門
二条大路
池
池
調査終了地
12・13次発掘地域
木簡出土地点



第12次発掘調査検出遺構図



第13次発掘調査遺構配置図